

平成29年度仙北市読書感想文コンクール（仙北市教育委員会主催・角館図書館後援会、(株)新潮社後援）が行われ、応募総数123点の中から仙北市長賞に中島雪さん（小中学校の部・角館高3年）、樋口香純さん（高校の部・角館高3年）が選ばれました。2月25日に仙北市総合情報センターで表彰式が行われ、入賞者に表彰状と記念品が手渡されました。仙北市長賞の受賞作品（原文）と審査結果を紹介します。

仙北市長賞
小中学校の部



命の炎が燃え尽きるまで
松木内中2年 中島雪

「余命一年半です。」
もし、私がこのような宣告を受けたらどうするだろう。絶望で体が震え、毎日泣き崩れているかもしれない。あるいは放心状態のまま、残りの時間を無駄に過ごすかもしれない。どちらにしろ平常心ではいられないだろう。しかし、この本の中の渡部成俊さんは違った。彼は若くしてすい臓がんを患い、その四年後に転移性肺がんを発症し、余命一年半と宣告される。それを知った彼は、想像もできない行動をとる。それは子供たちに「命の大切さ・尊さ」を訴えるために、地元江戸川区を中

仙北市読書感想文
コンクール
平成29年度

仙北市長賞
高校の部



いま、会いにゆきます
角館高3年 樋口香純

私はこの本を読んで、「幸せの価値観」について深く考えることになった。私が普段過ごしている生活は、ある人にとってはとても幸せなことであることに気づかされたからである。

この本は、母を亡くして二人で暮らしていた父と子の元に六週間だけ記憶を無くした母が戻ってくるというストーリーだ。私が中でも印象に残っているのは、三人で過ごす朝の時間だ。なぜなら母が戻ってくる前の二人の生活はとてもひどいものだったからである。その原因は父の身体にある。父は脳に異常があり、パニックを起こしてしまう体質のため普通の人と同じように暮らすのが困難だった。その生活から一変、母が戻ってくることに伴って父の生活がスタートした。きっと私が父の立場だったら、安心感と幸福で一杯になって泣いてしまうだろう。読んでいて私もホッとした気持ちになった。私も春から新生活が始まり、自分の身の回りのことを全てやらなくてはならない環境になったとき、改めて今の生活のありがたみを感じる

心に述べ六十ヶ所を周り、二万人の人々を対象に講演活動を行ったのだ。

私がこの本に興味を抱いたのは『命』について深く考えさせられたからだ。世の中にはいろいろな理由で命を絶って、リセットしたいと思っている人が多くいると聞く。自ら実行できないためネットで知り合った見も知らぬ人に依頼し、本当に命を落としてしまうという残忍な事件もつい先日、テレビを賑わしたばかりだ。

人は辛いことや苦しいことに直面した時、その場から逃避したいと思う。私もそうだ。私はバレエ部に所属しているが、よくミスをする。私のせいで試合が不利になってしまうこともたびたびだ。そんな時、自分はまだめな人間だと落ち込んでしまう。しかし、チームメイトの「どんまい！」という声でなんと立ち直ることができている。仲間によって私は支えられているのだ。

渡部成俊さんも家族や友人の理解や支えがあつて講演活動が実現できている。本当なら「なぜそんなことをするのか。」「もっと体を大切にしろ！」と猛反対されるだろう。渡部さんの体の状況を考えると当然だ。しかし、彼の周りの人たちは残りの人生を好きなように使わせたいという思いが強かったのかもしれない。彼は残りの短い人生を病院で過ごすことより、『命の大切さ』をなるべく多くの人たちに伝えるという生

き方を選択したのだ。人はなぜこの世に生まれてきたのか。生きるということはどんな事なのか。命とはどれだけの尊いのか。彼は多くの場所を駆け回り、これらのことを熱く語った。そして、宣告を受けたよりも長く生き、六十三才という若さでこの世を去った。

世の中には彼のようにもつと生きてたくても生きられない状況に置かれている人たちが多く存在する。反面、前述したように「もう生きてたくない。死にたい。」と言って自ら命を絶ってしまう人たちもいるのも事実なのだ。

人はいろいろな悩みを抱えることによって辛い、苦しい、悲しいなどマイナスの感情に支配され、「もう生きてたくない。」と思うのだろう。しかし、それは体が健康だからこそ起きる感情なのではないだろうか。この本と出会い、『命』について改めて考えさせられた。「もつと生きていたい」と思っても生きられない人、五体満足なのに「もう死にたい。」と嘆いてばかりいる人。世の中は理不尽なことばかりだ。

正直この本と出会うまでは自ら命を絶つことはそれほど悪いこととは思っていなかった。人にはそれぞれ事情があり、他人がどうこう言うことではないだろう。その程度のこととしか考えられなかったのだ。しかし、この本と出会い、渡部さんの生き方を知ることでの私の考えは一変した。『命』はそんなに軽いものでは

のではないのだと。

私は命を粗末にしている人にぜひこの本を手にとってほしいと思う。そして、渡部さんの生き方をしっかりと見つめてほしい。

渡部さんのような病に冒された時でさえ最後の命の炎が燃え尽きるまで、人のためにつくした人を前にして「死にたい」とまだ言えるだろう。私自身この本と出会い、人に支えられながら生きていた事を学んだ。それだけではない。

この世に生を受け、与えられた寿命をどう全うするかという事を考えるきっかけとなった。

世の中には健康で百歳まで長生きする人もいる。渡部さんのように不治の病に冒され、若くして人生を終えてしまう人もいる。

どの人生に価値があるかはわからないが、生きた時間より、自分に与えられた時間をどう生きたかが大切なことのように思われる。

渡部さんのように「余命ゼロ」となるまで周りの人々を考え、思いやり、その人たちの生き方にまで影響を与える。そんな生き方を私もしたいと思う。

この本は私の『生き方』のバイブルになった。

読んだ本『そんな軽い命なら私にください』余命ゼロ 命のメッセージ（大和書房）

のだろう、と思った。

また、父が記憶を無くした母に二人のこれまでの思い出を語るシーンも印象に残っている。高校生のときに出会い、うまくいかないときに励まされたこと、病気を発病してからも支え続けてくれたこと、一つ一つのエピソードに二人の信頼と絆が感じられるからだ。二人はお互いに支え合って生きてきたことが分かる。それと同時に、苦しいときを一緒に乗り越えてきた人を失った夫の悲しみも計り知れないだろう。私はまだこんな風に大切な人を無くしたことがないが、きつととても大きな喪失感に襲われるのだろう、と思った。

私は、この本を読んで、今の自分の生活を振り返った。毎日おいしいご飯を食べ、家族がいて、学校に行けばたくさんの友達がいる。これまでの私であれば、今の生活は極めて普通のことだと感じていただろう。しかし、自分が健康で当たり前の毎日大切な人と過ごすことさえできない人だっている。そのような人たちにとつて私はとても幸せな暮らしをしているのだと気づいた。これから高校を卒業し、社会人になり新しい生活が始まる。そんな中でも私は、当たり前の生活を大切な人と送ることができる幸せを、これまで以上に大切にしていきたいと思っている。

もちろん今よりももつと幸せになろうと努力することを、悪いことだとは思わない。しかしそれ以上に大切なことは、今の自分がどれだけ幸せ

か気づけるということである。小さな幸せでも満足できる大人になりたと思わせてくれた。

このことは、現代の社会にも通じることだろう。SNSが広く使われるようになり、他人の暮らしが簡単に目にすることができるようになった。都会や外国の暮らしに憧れを持つきっかけも多く、自分の中の幸せのハードルを高く設定してしまふ原因になるのではないだろうか。そんな現代人だからこそ、自分の幸せに気づくことが必要だ。幸せを欲張りすぎないこの考えは、一人一人が意識することによって社会問題を解決することができるかもしれない。自分が幸せであると満足できれば、普通の暮らしができていない人に目を向ける人が増えるだろう。そうして少しずつでも当たり前の暮らしを送れる人が増えれば、貧富格差が無くなっていく。「幸せの価値観」が均等になることが、世界の幸せへのスタートなのかもしれない。

読んだ本 『いま、会いにゆきます』（小学館）

審査結果（敬称略）

- ◆仙北市長賞（小中学校の部）
中島雪（松木内中2年）
樋口香純（角館高3年）
- ◆新潮文庫賞（小中学校の部）
鈴木未来（西明寺中1年）
- ◆高校の部
鈴木来実（角館高1年）
- ◆角館図書館後援会長賞（小中学校の部）
金谷青央（角館小2年）
- ◆高校の部
鈴木真子（角館高1年）
- ◆仙北市教育長賞（小中学校の部）
畠山紗依（西明寺小4年）
佐藤優美（同6年）
- ◆高校の部
佐藤亜南（角館高1年）



- ◆小学校低学年（1・2年）の部入選 船山悠稀（神代小1年） 千葉美空（生保内小2年） 伊藤愛莉（神代小2年）
- ◆小学校中学年（3・4年）の部入選 村岡すみれ（角館小3年） 浅利麻帆（松木内小3年）
- ◆小学校高学年（5・6年）の部入選 千葉茉帆（角館小5年） 齋藤健太（同5年）
- ◆中学校の部入選 武藤涼子（松木内中1年） 清水優真（神代中1年） 浅利真穂（松木内中2年）
- ◆高校の部入選 石田裕平（角館高1年） 高橋鈴佳（同1年） 高松来実（同2年） 伊沢菜々香（同2年） 三浦峻（同3年）
- ◆小学校低学年（1・2年）の部佳作 小田島愛優（生保内小2年） 津嶋このみ（神代小2年） 佐藤亜耶希（同2年）
- ◆小学校中学年（3・4年）の部佳作 佐々木彩結（西明寺小4年） 村田藍（生保内小4年） 船山宗能（神代小4年）
- ◆小学校高学年（5・6年）の部佳作 小田島光琉（生保内小5年） 鈴木飛巧（白岩小6年） 高橋陽（同6年）
- ◆中学校の部佳作 三河モモ（生保内中1年） 新田目真弥（同1年）
- ◆高校の部佳作 近南実（角館高1年） 佐藤愛（同1年） 原夕夏（同3年）

※ 新潮社の創業者・佐藤義亮は角館町出身です。新潮社からは、長年にわたり年間1000冊以上の全刊行物の寄贈が続いています。寄贈書を、より多くの皆さまにご利用いただきたく、昨年度から仙北市読書感想文コンクールに「新潮文庫賞」を創設しており、新潮社から届けられた賞状と記念品を贈呈しています。